

討論（プレプリント版）

アリストテレスにおける言語行為 としての述定 ——桑原への簡潔なコメント——

横路 佳幸

 <https://orcid.org/0000-0002-7501-5384>

慶應義塾大学大学院 文学研究科 哲学・倫理学専攻

〒 108-8345 東京都港区三田 2-15-45

2018 年 11 月 21 日原稿受付

Citation : 横路 佳幸 (2019). アリストテレスにおける言語行為としての述定 ——桑原への簡潔なコメント——.
Journal of Science and Philosophy, 2(1 (preprint)), 1–13.

本稿では、論文「アリストテレス『カテゴリー論』における述定とヒュポケイメノン」（桑原 (2017)）における桑原司の主張に対し簡潔なコメントを与えることで、桑原との討論のための問題提起を行う。なお、以下では桑原 (2017) を「同論文」とし、本文の括弧内に記載された頁数をすべて同論文からのものとする。

コメントに入る前に、同論文における桑原の主張を要約し整理しておきたい。桑原の目的は主として、次の二つに分けられる。一つは、アリストテレスの『カテゴリー論』第 2 章と第 5 章に対して著名な注釈者 (M.V. ウェディンや F.A. ルイスら) が与えてきた従来の解釈を退けることであり、もう一つは、古くから論争を巻き起こしてきた井上忠による独自のアリストテレス読解を援用し発展させることで、桑原独自の解釈を新たに提示することである。

桑原によると、これまで少なからぬ解釈者が、『カテゴリー論』においてアリストテレスは「言語表現と実在を並列させ、対応させながら、実在を考察している」(96 頁)のだとみなしてきた。このいわば「標準的な」解釈によると、『カテゴリー論』の議論展開において中心的な役割を担うとされる「述定 (predication)」は、我々の目の前の実在または世界の配列や構造を記述する、または「 x は F である」といった単純な言明が真であるための真理条件を明らかにするものとなる。たとえば、ソクラテスという個物について人という種が「語られる」すなわち「ソクラテスは人である」という形式で述定されるとき、これは次の二点を解明するのに貢献すると考えられる。第一に、人という種とソクラテスという個物の間の特定の存在論的な配列・構造が実在の側で成立しているという点、第二に、「ソクラテスは人である」という言明の真理がそうした配列・構造に関する事態の成立にあるという点である。これに従えば、少なくとも『カテゴリー論』におけるアリストテレスは、「 x は F である」という形式の述定に焦点を当てることで、個物や種をはじめとする一連の存在者を内包する仕方で実在の配列と構造を記述すると同時に、それと関連させながら述定言明の真理条件と真理を明らかにすることを目指していたと見ることができる¹。

しかし、桑原によれば、こうした比較的広く受け入れられた解釈には重大な困難がある。桑原がそうみなす主たる理由は、アリストテレスが「述定」について述べる時、実在の配列・構造の記述ではなく、**何らかの言語行為の遂行**が意味されているように見えるからである。言語行為は、本質的に発話者や行為者の存在を伴うものであるがゆえに、常に「人称的」なものである。他方で、実在の記述は、個別的には発話者や行為者によってなされるとしても、それ自体は主観や相対性とは無縁の「非人称的」なものである。仮に「実在」の名に値するものが一つしかないとすれば、真なる(すなわち実在に即した)記述は基本的に、客観的で絶対的という意味で非人称的であるべきとすら言えるだろう。だがこうした対比にもかかわらず、従来の標準的な解釈者——桑原の言葉では「権威ある解釈者たち」(99 頁)——は、「話し手による言語行為と非人称的な「配列」という全く異なる事柄」(100 頁)を一様に後者

についての記述または説明という視点で捉えてきた。これは、述定という言語行為の可能性を不当に看過するに等しい。

そこで、桑原は「述定する」という語の原義などを周到に参照しながら、従来の解釈から零れ落ちた述定の言語行為的な側面を強調する。その側面とは、具体的には「属性という「もの」を帰属させたり、種や類という「もの」によって分類する側面と、それらの「もの」に対応する言葉を発する側面」(101 頁)のことである。桑原によれば、アリストテレスの述定は「「もの」を「もの」について述定する側面と、「もの」をある言葉で呼ぶ側面を持つ言語行為」(103 頁)として読む余地を残すものであり、そうした言語行為を非人称的な存在論的配列の記述に取り換える理由はどこにもない。桑原の最も根幹的な主張は、次の一文で示される。

アリストテレスは、述定という言語行為、すなわちある対象を F と呼ぶ、または記述するという行為の際に、話し手は、最終的に何らかの個体実体を前提的に了解し、想定している、ということを言いたかったのであり、非人称的な実在の「配列」を記述したかったのではない。
(105 頁)

アリストテレスにとって、「 x は F である」という形式の述定が担うべき最も主要な役割は、たとえば個物 x を F (種など) と呼ぶことによって、話し手が x を F の当てはまる対象として前提的に了解・想定していると示すことである。つまり、述定すなわち「ある対象を F と呼ぶという言語行為」の核心は、「話し手の実在についての了解事項を明らかにすること」(105 頁)にあると言える。したがって、アリストテレスが「述定」を通じて中心的に論じようとしていたのは、従来の解釈とは異なり、「話し手と聞き手による言葉のやり取り、つまり言語行為によるやり取り」(106 頁)なのである。

以上が、(細かな点を省略した)桑原の主張である。同論文の論旨は明確であると同時に、すでに定着した標準的な解釈に反旗を翻し、言語行為に立脚した独自の解釈を提示するという点において、桑原の試みは野心的かつ独創的である。特に、国内においてすら顧みられることが少なくなっている井上忠

のアリストテレス解釈を新たな装いのもとで蘇らせ、述定を「*F*と呼ぶという言語行為」として読み替えるというプロジェクトは——もしそれが成功したとすれば——現代の形而上学・言語哲学などの諸分野に対しても示唆に富む帰結をもたらすであろう。また、桑原は同論文の末尾で「アリストテレスの存在論全体を、話し手の視点を持つものとして再解釈できるかもしれない」(106頁)とも述べていることから、同論文の試みが、『カテゴリー論』という一つの古典的なテキストに対する注釈に限定されるものではないことが見て取れる(その注釈はときに詳細な文献学の手ほどきを借りて、微に入り細を穿ったものとなりがちである)。述定に関する桑原の主張が正しいとすれば、それは実在の配列や述定言明の真理条件に関する標準的な解釈を退け、*F*と呼ぶという話し手の言語行為に根差した新たなアリストテレス像の誕生を促すだろう。

ただし、残念なことに私は古典哲学を行う者ではない。このため、上記の「桑原解釈」がアリストテレスの文献上の証拠にどれほど裏付けられるかについて判断を下すことは、私には困難である。しかし、言語行為というテーマが議論の中心を占める以上、語るべき言葉が私にまったくないというわけではないように思われる。そこで以下では、言語行為という一般的な観点から「桑原解釈」に対して簡潔なコメントを与えることにしたい。あらかじめ述べておけば、私は桑原解釈に対し小さくない希望を見出すものの、そこまで楽観的でない。いられるわけでもない。

桑原によれば、従来の解釈が退けられる主たる理由は、述定が「**「もの」**を「もの」について述定する側面と、「もの」をある言葉で呼ぶ側面を持つ言語行為」だとすれば、「必ずしも非人称的な**「存在論的配列」**として理解する必要はない」(101頁)からである。たしかに、桑原が指摘する通り、述定が(後述するように)何らかの意味で言語行為的であるというのはありうる話であり、また「話し手抜き非人称的な述定」という言い回しもどこか奇妙な響きを持つかもしれない。しかし、私が疑問に思うのは、**述定に備わる言語行為という側面が、本当に従来の解釈、すなわち実在の構造・配列の記述という側面と両立しないのだろうか**、という点である。もしこれらが両立しうるのだとすれば、桑原による指摘は、「従来の解釈を退ける」というより

も、むしろ「従来では看過されていた点を説明する」という種類のものとなる。私が読む限りでは、桑原は、述定が持ちうる「実在の記述の側面」と「言語行為的な側面」の両側面が両立不可能であることをあらかじめ仮定したうえで、後者の側面への焦点を通じて、存在論的配列の非人称的な記述としての述定を排除しているように見受けられる。だが、本当にこの両立不可能性は自明なのだろうか。

私がこのような疑問を提起するのには理由がある。それは、「言語行為」と一口に言っても、それは様々な種類を含みうるからである。いま仮に、桑原が問題とする「言語行為」が、古くは J.L. オースティンにまで遡ることのできるいわゆる言語行為論 (speech act theory) の観点から十分に理解可能であるとしよう (cf. Austin (1975)). このとき、桑原が「述定する」の原義として挙げる「告発する」というのは、言語行為の中でも特に発語内行為 (illocutionary act) の典型例だと考えることができる。発語内行為は、単に何かを述べる (saying something) にすぎない発語行為 (locutionary act) とは異なり、一定の慣習的な効果——オースティンはそれを発語内的な力 (force) と呼んだ——をもたらし、眼前の状況を何らかの仕方で変化させようとする行為である。たとえば、「私は、ここに A と宣言する」とあなたが述べるとき、あなたはこう述べる際に特定の宣言という行為を行い、新たな状況を作り出すことになるはずである。これまで様々な仕方で論じられてきた通り、発語内行為の典型例としては、宣言や告発の他に、警告や命令、謝罪、約束などを挙げることができる。

しかし、我々がここで注目すべきは、発語内行為そのものではなく、その分類について一般的に認められている次の二点である。

- (1) 発語内行為は、発語行為でもある。
- (2) 発語内行為には、主張 (assertion) が含まれる。

まず (1) については、発語内行為と発語行為の關係に鑑みると当然の帰結である。あなたが告発や宣言についての発語内行為を行うとき、あなたは必ず何かを述べている、すなわち発語行為を行っているはずである。オースティンによれば、発語内行為と発語行為は対比される二つのものというよりも、発語行

為のうち、発語内的な力を伴うような特殊な種類のものが発語内行為だと考えるのが適切である。次に (2) は、発語内行為の一種として主張に焦点を当てるものである。主張は、命令や欲求の表出とは異なり、いわゆる事実確認に関する (constative) 典型的な発語行為である。よく知られた言い回しを用いて述べれば、主張とは、語 (心) から世界への適合方向 (direction of fit) を持ち、その主張内容は世界を正確に写し取り、実在がどのようなものであるかに適合せねばならないものだと言われる。このため、*P* という内容の主張を行う目的や効果とは、実在の適切な表象を獲得し、*P* という真なる命題にコミットすることだと言える (cf. Searle (1969); MacFarlane (2005))。日常的な場面を想定すれば明らかであるように、ある話し手が通常の平叙文を使用するときでも、彼女は必ずしも発語行為しか行っていないというわけではない。彼女は、世界が平叙文で記述される通りであると信じ、実在を表象し真理にコミットしようとする点において主張の力を伴った発語内行為を行っている可能性がある²。

こうした (1) と (2) の考えは、桑原の解釈にとって少なからぬ含意を持つように見える。たとえば、「ソクラテスは人である」と私が述べたとしよう。これは、ソクラテスを人という種によって述語づける典型的な述定である。桑原によれば、私のこうした発話は何らかの「言語行為」、特に「話し手が *F* と呼ぶ行為」だとされる。だとするとこの行為は、上記の言語行為論の観点から見るとどのようなものだろうか。まず、それは発語行為である。明らかに私は何かを述べているからである。次に、それは発語内行為だろうか。特殊な語用論的な効果や文脈を想定するのでなければ、話し手が *F* と呼ぶ行為を命令や欲求の表出と並べるのは難しいだろう。言い換えれば、*F* と呼ぶことによって世界の側が発話内容に適合するよう変化することが期待されるわけではないゆえに、述定という発語行為の適合方向は、世界から語 (心) への適合方向を持っていないように思われる。その代わりに、述定に最も近い機能を持つ発語内行為とは、語 (心) から世界への適合方向を持つ言語行為、特に先に述べたような**事実確認に関する発話としての主張**であるように私には思われる。つまり、「ソクラテスは人である」と述べる際に述定という発語内行為を行うことは、ソクラテスが人であるという実在の一部の適切な表象を獲得し、「ソ

「ソクラテスは人である」という命題が真であることにコミットするということだと解釈可能である。そして注目すべきことに、いま文 S の発話による主張 (述定) 内容が S の表す真理条件的な命題に等しいのだとすると、主張という発語行為・発語内行為としての述定はこの場合、「実在の記述または真理条件の明示化」の要素を**排除するわけではない**。というのも、「ソクラテスは人である」という発話による主張内容としての意味論的な命題は、ソクラテスが実際に人であるという実在を的確に描写するゆえに真理条件的に真であってよいからである。少なくとも問題の主張者は、こうした真理にコミットしようとしていたがゆえに主張という事実確認的な発話を行ったはずである。以上から導かれるのは次のことである。すなわち、「 x は F である」という形式を持つ述定が、そこで述べられる命題の真理へのコミットメントを伴う発語内的な力を持つという点において主張という発語内行為であるとしても、そのことは、その述定・主張の内容としての真理条件的な命題が実在の正確な記述という意味で真であるということを妨げない。

したがって、桑原の解釈に対する私の主な疑念は次の点にあると述べることができる。すなわち、もし述定が主張という発語内行為であると認められるのであれば、仮にその言語行為的な側面を強調したとしても、それは必ずしも従来の標準的な解釈に対する論駁にはならないのではないか、という点である。もちろん、私はここで「述定が言語行為だとすれば、それは必ず発語内行為、特に主張と理解せねばならない」と論じようとしているのではない。桑原の言う「言語行為」がいわゆる言語行為論の範疇で捉えきることのできるものであるかは明らかではなく、また述定がそもそも言語行為であるかどうかについても議論の余地が (アリストテレスの解釈上) 少なからずあるからである。前段落の考えは、あくまで述定を発語行為とみなしたうえで、さらに発語内行為の一種として理解するための数ある可能性の一つにすぎない。しかし、桑原は述定を発語内行為、まして主張と解釈する可能性に一切触れることなく、「個物 x を F (種など) と呼ぶ」という行為が述定の言語行為であると述べるに留まる。私には、これがいかなる意味で「言語行為」であるのかまったく不明瞭に映る。

先に述べた通り、たしかに x を F と呼ぶことは、それが「何かを述べる」ものである限りは、発語行為ではあるだろう。さらに、それは発話者の存在を要請するゆえに、何らかの意味ではもちろん「人称的」ではある。だが、そのことを指摘するだけで、桑原の議論がアリストテレス解釈において特異な地位を占めるようになるとは到底思われない。少なくとも、 x を F と呼ぶことが発語行為であるという指摘が、従来の「実在の配列・構造の記述および真理条件の明示化」というアリストテレス解釈と対立するものでないのは明らかである。そのため、もし桑原が自身の解釈と従来の解釈を対比させるために、 x を F と呼ぶことが発語内行為でもあると考えるならば、それがどのようなものであるか——たとえば、どのような適合方向を持つのか、またどのような発語内的な力を伴うのか——を明らかにする責任を桑原は負うはずである。さらに、述定の際に「話し手が x を F の当てはまる対象として前提的に了解・想定している」と示されるという桑原の論点についても、飛躍がないとは言えないだろう。「話し手が x を F と呼ぶこと」と「話し手が x を F の当てはまる対象として前提的に了解していると示すこと」がどのようにして結び付けられるのかについて桑原は何も述べていないからである。

もし私が桑原の解釈を修正する機会に恵まれたとすれば、私自身が好む「述定」の言語行為とは、やはり主張という発語内行為である。その理由の一つには、主張という言語行為が、「知識」や「真理」、「語用論的前提」などの一連のテーマと密接に結び付くために実り豊かな示唆をもたらしているからである。そのことは、主張が古くから一貫して認識論や言語哲学(特に意味論と語用論)上の一大トピックの一つであり続けてきたことから明らかだと思われる (cf. Brown and Cappelen (2011); Goldberg (forthcoming); Pagin (2016)). 簡潔ながら具体例で見ておくことは無駄ではあるまい。いま仮に、主張とはその言語行為に特有の規則によって統制される発語行為だとしよう。ある著名な(そして物議を醸してきた)見解では、その規則は、「ひとは次のことに従わねばならない。すなわち、ひとが P を知る (knows) ときのみ、 P と主張せよ」と考えられる (cf. Williamson (2000)). これによると、あなたが「ソクラテスは人である」と主張しながら、他方でそのことをあなたが知らないというの

は、知識の規則に違反するゆえに主張の適切性を損なうものである。その他の見解では、 P という主張に認められる統制的な規則とは、 P の知識ではなく、 P の真理、または P という (正当化された) 信念とみなされるかもしれない。これらのうちどの見解が正しいかについてはさておき、主張という言葉行為が知識、真理、信念その他に関する規則や規範 (のいずれか) と深い結び付きにあるというのは大いにありうる話である³。これはつまり、「ソクラテスは人である」という述定が適切な主張であるときには、その主張を行う者は、ソクラテスは人であるという述定的知識や述定的真理、述定的信念など (のいずれか) を持っていなければならないということを示唆する。主張者の認知状態に焦点を当てるこうしたアプローチは、「言語行為を遂行する話し手の視点」(97 頁) や「言語行為の主体としての話し手が捉えている限りの実在」(106 頁) を重視しようとする桑原のアリストテレス解釈からそれほど遠からぬものであるようにも見える。

他にも、ある見解にならって、主張とは語用論的な前提 (pragmatic presupposition) と結び付けられるものだと考えることもできる (cf. Stalnaker (1999))。この場合、 P という主張が受容される (accepted) と、 P は話し手と聞き手の会話で相互に共有される知識・情報としての共通基盤 (common ground) に含まれるようになり、それ以降 P の真理が当の会話において語用論的に前提されるものとなる。たとえば、私とあなたの会話の中で私が「ソクラテスは人である」と主張したとすると、私とあなたの共有する情報が更新され、それ以降の会話では、ソクラテスが人であることは共通基盤として前提されることとなる。こうした動的な枠組みは、桑原の言う「話し手は、最終的に何らかの個体実体を前提的に了解し、想定している」(105 頁) こと、あるいは「話し手の実在についての了解事項」(105 頁) のあり方を説明するのに何らかの形で資するものかもしれない。少なくとも、桑原のアリストテレス解釈が「話し手と聞き手の共有する会話上の背景情報」と関わりと考えられる限り、主張としての述定が語用論的前提と結び付くというアプローチは、好意的な検討に値するものと言える。

本稿を締めくくる前に、ここまでの短い論述を要約しておこう。私が桑原に

対して提起したく思う主要な論点は、次の三つに絞り込むことができる。第一に、述定を「*F*と呼ぶ」という言語行為として読むという桑原の解釈は、単なる発語行為にすぎないという疑惑から逃れておらず、「人称的」という特徴づけでは非常に不明瞭であるという点である。第二に、もし桑原の解釈を私なりに再構成して、述定という言語行為に「主張という発語内行為」の観点を導入するのであれば、それは知識や真理、信念、語用論的前提などの豊穡なテーマと関連付けられうることになるゆえに、実り豊かな示唆をもたらすという点である。特に、「言語行為の主体としての話し手が捉えている限りの実在」や「話し手は、最終的に何らかの個体実体を前提的に了解し、想定している」という言い回しで桑原が述べようとしたことは、述定を主張とみなすことでより理解可能なものとなり、より鮮明となるかもしれない私はほのめかした。しかし、そのときでも忘れてはならないのは、仮に述定が主張という発語内行為であるとしても、そのことだけをもって従来の標準的な解釈が拒否されることにはならないということである。これが私の提出する第三のポイントである。通常の主張が事実確認的で命題的な内容を持つと同様に、「主張としての述定」の内容もまた真理条件的であってよいし、実在の構造・配列に対応して真となるものであってよいはずである。つまり、もし私の再構成が正しい方向に向かっているとすれば、桑原による指摘は、「従来の解釈を退ける」というよりも、むしろ「従来では看過されていた点」、特に述定が発語内的な力を備えうるという点、そして述定が話し手の知識や真理、信念、あるいは会話の前提などと強く関連付けられるという点を明らかにするものとなる。したがって、述定が持ちうる「実在の記述の側面」と「言語行為的な側面」の両側面は必ずしも両立しないわけではなく、それゆえに後者の側面を重視する桑原の解釈それ自体は、前者の側面を重視する従来の「権威ある解釈者たち」の拒絶を含意しない。この点において、桑原は退ける必要のないものまで退けてしまっているように思われる。他方で、仮に述定が主張から明確に区別される特定の言語行為だと想定するのであれば、桑原はその「言語行為」がどのようなものであるか（発語内行為としての主張とどのように異なるのか）、そしてそれがいかにして従来の解釈と衝突するかを正確に示す責任を果たさねば

ならない。いずれにしても、桑原の見解には看過しがたい不備と問題が残り続ける。

私からのコメントは以上である。独創的な観点と示唆に富んだ解釈を提示する同論文の価値は、私の問題提起によって根底から瓦解するということにはならないだろう。まして私は、述定を言語行為として読むという方針そのものについては基本的に賛成の立場であり、桑原の解釈の細部に批判的であるにすぎない。しかし、述定という「言語行為」の内実と射程をあいまいにしたまま、桑原が従来の標準的な解釈をあっさりと退けてしまうとき、その解釈への親しみも捨てきれない私は、桑原の言葉をそっくりそのまま返して「性急すぎる」(101 頁)と抗弁したい衝動に駆られる。これまで繰り返してきた通り、私の考えでは、言語行為、特に主張としての述定の可能性は、それがもし『カテゴリー論』に対する正しい解釈だとしても、新たなアリストテレス像を打ち立てるというよりも、むしろ従来の標準的なアリストテレス像をうまく補完するものである——こうした帰結にいかなる不満があるだろうか。

最後に、本稿が桑原との実り豊かな討論のためのよい口火となること、そして桑原の今後の研究プログラムが発展し成功することに大いなる期待を寄せて、本稿を締めくくりたい⁴。

注

¹ こうしたアリストテレス像は、いわゆる分析哲学の観点から見るとより馴染み深いものとなるだろう。というのも、この解釈は、実質的には次のような素朴な哲学体系と等しいからである。その体系とは、形而上学においては個体と種の両実在論(および個体による種の例化を認める見解)を受け入れ、意味論においては真理条件的意味論(またはモデル論的意味論)を受け入れるものである。この体系によると、「ソクラテスは人である」という形式の述定は、第一に、ソクラテスという個物と人という種が実在し、前者が後者を例化するという存在論的な事実と対応し、第二に、当の述定言明が真であるのはそうした事実が成立するときかつそのときに限るという意味論的な条件と対応するものとなる。

² ただし、後に簡潔に触れるように、真理へのコミットメントに焦点を当てる説明は——比較的受け入れられているものではあるものではあるが——主張に対するありうる説明の一つにすぎない。ある分類に従えば、主張のありうる説明は(互いに排他的というわけではないものの)主として四つに分けられる(cf. MacFarlane (2011))。

³ 補足的に近年のトレンドに言及しておく、「知識のみが主張を保証するという見解が、近

年の哲学文献において人気を博している」 (Lackey (2007), p. 594) という指摘や、「現代の認識論では、知識の本性と価値にまつわる諸問題に対するアプローチとして、知識の規範的な役割の考察を利用するものが増えつつある。たとえば、様々な論者が近年、知識こそが主張と行為にとって規範的に要請されるものであると論じている」 (Smithies (2012), p. 265) という指摘は正しい。言語哲学や認識論におけるいわば「大御所」たる哲学者がこぞって、主張と知識を規範的に結び付けているのは示唆的である。

⁴ 本稿の草稿に対して詳細かつ適切なコメントをくださった桑原司氏、高谷遼平氏、中崎紘登氏、匿名の査読者の方に謝意を申し上げる。特に、私の提案に反対の立場であるにもかかわらず、粘り強く討論をしてくださった桑原氏には一層の謝意を申し上げたい。なお、本稿は慶應義塾大学博士課程学生研究支援プログラムの助成を受けたものである。

参考文献

- Austin, J. L. (1975), *How to Do Things with Words*, 2nd edn., Oxford: Oxford University Press.
- Brown, J. and Cappelen, H. (ed.) (2011), *Assertion: New Philosophical Essays*, Oxford: Oxford University Press.
- Goldberg, S. C. (ed.) (forthcoming), *The Oxford Handbook of Assertion*, Oxford University Press.
- 桑原司 (2017) 「アリストテレス『カテゴリー論』における述定とヒュポケイメノン」, 上智大学哲学会 (編) 『哲学論集』 第 46 号, 95–111 頁.
- Lackey, J. (2007), “Norms of Assertion”, *Noûs* 41, 594–626.
- MacFarlane, J. (2005), “Making Sense of Relative Truth”, *Proceedings of the Aristotelian Society* 105, 305–23.
- MacFarlane, J. (2011), “What Is Assertion?”, in Brown and Cappelen (2011).
- Pagin, P. (2016), “Assertion”, in E. N. Zalta (ed.), *Stanford Encyclopedia of Philosophy*, Winter 2016 edn., URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/win2016/entries/assertion/>>.
- Searle, J. (1969), *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*, London: Cambridge University Press.
- Smithies, D. (2012), “The Normative Role of Knowledge”, *Noûs* 46, 265–88.
- Stalnaker, R. (1999), *Context and Content: Essays on Intentionality in Speech*

and Thought, Oxford: Oxford University Press.

Williamson, T. (2000), *Knowledge and Its Limits*, Oxford: Oxford University Press.

This work is licensed under a Creative Commons
“Attribution 4.0 International” license.



© 2019 Journal of Science and Philosophy 編集委員会